彙報

第三九回国際アルタイ学会

岡田　英弘

常設国際アルタイ学会 Permanent International Altaistic Conference (PIAC) は、その第三十九回会議を一九九六年六月十六日（日）から二十一日（金）まで、ハンガリーのセゲド市 Szeged で開催した。セゲドは首都ブダペシュトの西駅から南へ、インターシティ特急列車で二時間余り、ティサ河に臨みユーゴスラヴィア国境に近い美しい町である。

今回の会長 President は、同市のヨージェフ・アッティラ大学 József Attila Tudományegyetem アルタイ学科 Altajisztikai Tanszék 主任教授アールパード・ベルタ Árpád Berta が勤めた。実はアメリカ・ユタ州プロヴォのブリガム・ヤング大学が先に主催の名乗りを上げたのだが、本年がハンガリー建国一千一百年に当たるということで、その記念事業の一環としてセゲドで国際アルタイ学会が開催されることになったのである。

六月十六日の夕食時までに、参加者はそれぞれ会場のフンガーリア・ホテル Hungária Hotel に到着、ロビーで登録 Registration をしてプログラムなどの入ったバッグと名産の粉末パプリカを受け取り、宿泊室の割当を受けた。参加費は一人三百五十米ドルであったが、筆者（岡田英弘）は前回の会議（第三十八回、神奈川県川崎市）を主催した会長の特権で、妻の宮脇淳子ともども参加費を免除された上、東京－ブダペシュト間の往復航空運賃一人分の払い戻しを受けた。日本からは他に、清瀬義三郎、斎藤純男、ロジスキー William Rozycki が前回に引き続き参加した。参加者の総数は、名簿によれば九十七名であった。ただし同伴家族を除く。在住国別では、ハンガリー二十六名、ドイツ十九名、アメリカ十名、ロシア八名（内タタルスタン一名、ブリヤチヤ一名）、日本七名、カザフスタン五名、トルコ四名、オランダ三名、ポーランド三名、イタリア二名、フランス二名、以下、韓国・キルギズスタン・スロヴァキア・中国（ウイグル族）・ノルウェイ・フィンランド・ベルギー・香港各一名である。

同夜は参加者一同、夕食を共にして歓談した。もともとハンガリーの料理は美味なのだが、このホテルの食事はこ

とに上等で、これ以後毎日、前菜かスープ、肉か魚の主菜に甘いデザートと、白か赤のワインが付くという豪華さだったので、一同大いに満足した。

翌十七日（月）の朝から会議が始まった。まず開会式では、ベルタ会長が開会を宣し、続いてハンガリー共和国大統領ゴンツ Árpád Göncz の祝辞をモルナール Ádám Molnár が代読、建国一千一百年記念委員会事務局長デメ Péter Deme、セゲド市長サライ István Szalay、チョングラード県会議長レーマン István Lehmann が歓迎の辞を述べた。

ここで一波瀾あり、ベルタ会長が事前に三人のインディアナ大学アルタイ学賞選考委員と相謀って、常設国際アルタイ学会書記長デニス・サイナー Denis Sinor の八十の寿を賀するとして突然、同賞の金牌をサイナーに贈呈する一幕があり、不意を突かれたサイナーは、これを規則違反として抗議した。後日協議の結果、サイナーは既に一度受賞しているという理由で今回は辞退し、授賞はなかったことになった。

開会式の特別講演として、ローナ＝タシュ András Róna-Tas が「ハンガリー人の移住と建国」を講じた。これを含めて、今回の会議では、すべて七十三篇の研究発表があった。

開会式に続いて、昼食を挟んで、サイナー書記長の司会のもと、恒例のコンフェッションズ Confessions が行われ、参加者各自、自己紹介と近況を語った。この席上で、スターリ Giovanni Stary は、前回の川崎会議の紀要 Proceedings が来会直前に刷り上がったことを報告、一本をサイナー書記長に献じた。全四二五頁、三十二篇を収めるこの美麗な紀要の刊行は、前年末の締切から僅かに半年という異例の早さで、岡田前会長に代わって編輯出版の労を執ったスターリの献身的努力の賜物である。

午後のコーヒー・ブレイクの後、研究発表 Paper reading が本格的に始まり、A・Bの二部会に分かれて進行した。一篇あたりの持ち時間は十五分に制限された。翌十八日と翌々十九日は、それぞれ全日を研究発表に充てた。次に発表者名と題目を列記する。

十七日（月）

斎藤純男「西方中期モンゴル語における語形の表記の変化」

リュバツキ Volker Rybatzki「中期モンゴル語私文書の同定と編年のいくつかの補助手段」

ヌフテレン Hans Nugteren「モンゴル系周辺諸言語の分類について」

コルラン Bekbalak Korlan「南カザフスタンのカザフ人の埋葬・追悼儀式の記念碑」

マラエフ Alibek Malayev「パズィルィク――装飾品解読の方法」
ウスマノヴァ Emma Usmanova「女の被り物とそのユーラシアの古代文化における記号論的位置」

この晩の午後七時からは、一同徒歩で近くのチョングラード県庁に向かい、そこでレーマン県会議長の招宴があった。

十八日（火）

崔漢宇 Han-Woo Choi「アルタイ・シャマン教の用語について」
ポッツィ Alessandra Pozzi「吉林省のある村の満洲人のシャマン教――その現状」
エルジラスン Ahmet B. Ercilasun「トルコ語における接辞母音のリエゾン」
ツェルナロヴァ Xénia Celnarova「ズィヤ・ギョカルプの立場から見た古代トルコ人の宗教思想」
キョーハルミ Katalin Kóhalmi「トゥングース神話における太陽の家族」
ビルタラン Ágnes Birtalan「ホブドのオイラト人の山の主と水の主」
コルクマズ Zeynep Korkmaz「西方諸言語とトルコ語文法への影響」
デミル Nurettin Demir「アナトリア方言における過去形-(y)XK」
シュッツ Ödön Schütz「七世紀のアルメニア地理書に見えるスキュティアとサルマティア―歴史・地理文献の新版について」
ジモニィ István Zimonyi「コンスタンティノス・ポルフュロゲンニトスのハンガリー人に関する章に見える遊牧政治組織の観念」
フィーツェ Hans-Peter Vietze「ウイグル文字の電算化」
グリヴレ Steven Grivelet「言語介入について――一九三〇年代のモンゴルにおけるラテン文字化の試み」
ツィーメ Peter Zieme「古代トルコ人のアルコール性飲料」
バシュキ Imre Baski「トルコ語の人名――ラーショニィ蒐集のトルコ語人名とその発表方法」
ライト David C.Wright「チンギス・ハーンの死」
陳学霖 Hok-lam Chan「フビライ・ハーンのための統治術―張徳輝と李治の場合」
テュルクメン Fikret Türkmen「トルコの民俗笑話におけるイラン、アラブ起源の類型」
アカリン Şükrü Haluk Akalin「ショル方言における借用語」
宮脇淳子「ジューンガル滅亡時のホイト部長アムルサナ――

カザン発見のオイラト系譜の重要性」
ミザーヴ Ruth I. Meserve「中央ユーラシアについての西方の医学報告」
タウベ Erika Taube「なぜ語り部はしばしば語らないか」
デーチ Gyula Décsy「マクロ社会言語学的謎としてのチュヴァシュ問題」
アジャガーシ Klára Agyagási「チュヴァシュ語におけるチェレミス語の借用の年代解釈の理論的可能性」
中見立夫「一九一〇年代のモンゴル独立宣言に関する新史料」
ドゥガロフ Bayir Dugarov「叙事詩『アバイ・ゲセル』——伝統と現代」
シャハノヴァ Nurilia Shakhanova「カザフ伝統社会の性・年齢階層」
ロース Marti Roos「黄ウイグルの発展について」
スタホフスキ Marek Stachowski「ドルガン語とヤクート語における数詞、日付・年齢表現について」
アイデミル Hakan Aydemir「トルコ諸語における第一音節の円唇母音の性質」
ケルナー＝ハインケレ Barbara Kellner-Heinkele「辺境における学問——十八世紀のクリム・タタルとノガイのウレマー」
オダカ Hiroki Odaka「オスマン・トルコの史料に見えるロシア君主の称号」
イヴァニッチ Mária Ivanics「新発見の『アルタン・デブテル』——チンギス・ナーメの本文批判」
清瀬義三郎「女直語から満洲語への口蓋音・軟口蓋音調和の消滅」
ロジスキー William Rozycki「満洲語 muji（大麦）とその東アジアとの連係」
ゴレロヴァ Liliya M. Gorelova「ロシアにおける満洲語研究とヨーロッパ語文法観念の満洲語への適用」
シャールキョジ Alice Sárközi「裁きの日は本当に来るか——モンゴルの黙示文献について」
ジャンビノヴァ Jelena Dshambinowa「カルムィクの英雄説話中の白兎」
エールディ Miklós Érdy「ユーラシアのフン人の歴史の二つの異説の多い領域についての考古学的考察」

十九日（水）

ミラー Roy Andrew Miller「内陸アジア・ユーラシアとの接触についての韓国語の証拠」
ハウエル Richard W. Howell「/r/Z N THE HOOD」
オルズバイ Bibijna Oruzbaj「キルギズ語・トルコ語の関係について」

ガリウリン T. N. Galiullin「タタル語の詩はいかなる過程か——伝統的様式の発展」
アルパートフ V. M. Alpatov「日本語のアメリカ化と英語の日本化」
マルチュコフ Andrej Malchukov「形態学から見たアルタイ諸言語における所有者上昇の現象」
セルトカヤ Osman Fikri Sertkaya「ルーン文字のチョイル碑文」
ドブロヴィチ Mihály Dobrovits「オンギン碑文の新編年」
岡田英弘「ハスルンドの『トレグート・ラレルロ』の解読」
スターリ Giovanni Stary「十八世紀の満洲文のハンガリーとその近隣諸国の記述」
ヴァルラーヴェンス Hartmut Walravens「乾隆帝の外征に関する肖像画——附、満漢文の賛」
チャトー Éva Csató「リトアニアのカライム人社会」
フィルカウヴィツィウテ Karina Firkauviciute「カライム人の典礼歌」
シポシュ János Sipos「トルコ語、モンゴル語、トゥングース語、ハンガリー語における類似の音楽的構造」
デルファー Gerhard Doerfer「チルゲルの自己批判と種族浄化の問題」
ナジ Éva Kincses Nagy「チャガタイ語におけるモンゴル語からの借用」
ドロンプ Michael R. Drompp「トルコ人とヴォルスング族」
トリヤルスキ Edward Tryjarski「ルーン文字の統一性と多様性——南イェニセイ・アルファベットを分離する試みについて」
トンゲルロー Alois van Tongerloo「マニ教古代ウイグル語文献に見えるインド起源の仏教的人名」
ポルツィオー Tibor Porció「『白傘蓋陀羅尼』のウイグル語本とチベット語本」
タタール Magdolna Tatár「チュヴァシュ人についての初期の言及」
キナヤトゥリ Babakumar Kinayatuli「モンゴル国のカザフ人の獣医学」
ラフマン Abdukerim Rahman「『ディヴァヌ・ルガト・イッ・トゥルク』に見える地名の語源」
バサラク Armin Bassarak「トルコ語の動詞接尾辞の結合制限について」
ジラヒ Mariann Zilahi「タタル語における言語的新制度?」
ボイコヴァ Elena V. Boikova「ロシア軍参謀のモンゴル遠征——十九世紀末」

ディ・コスモ Nicola di Cosmo「十九世紀初めの清・コーカンド関係に関する満洲語文書」

この日の午後五時四十分から総会 Business meeting があり、本年のインディアナ大学アルタイ学賞 Indiana University Award for Altaic Studies（通称 PIAC Gold Medal）がポタポフ L. P. Potapov に授与されることが、あらためてサイナー書記長から発表された。続いて過去三回以上参加の会員の投票により、岡田英弘、バルバラ・ケルナー＝ハインケレ Barbara Kellner-Heinkele、ジョヴァンニ・スターリ Giovanni Stary の三人が、来年のアルタイ学賞選考委員に再選された。サイナー書記長はこの結果に大いに満足であった。

デイヴィッド・ライト David C. Wright がブリガム・ヤング大学 Brigham Young University を代表して、一九九七年の第四十回国際アルタイ学会をユタ州に招待することを発表した。会長はデイヴィッド・ハニー David Honey である。開催の時期は六月初めとされたが、これは第三十五回国際アジア・北アフリカ研究会議 The 35th International Congress of Asian and North African Studies（七月七～十二日、ブダペシュト）、及び第七回国際モンゴル学会 The 7th International Congress of Mongolists（八月十一～十六日、ウラーンバートル）と時期が重ならないように配慮してのことである。ただしユタ州は人も知るモルモン教王国で、教義上、禁酒・禁煙・禁茶・禁珈琲である。このため参加者が減ることを憂えた主催者側は、こうした戒律の適用されない山上のスキー・リゾートを会場とすることを考えているという話であった。

議事の最後に岡田英弘が立って、参加者一同を代表して、会長以下のハンガリー側の労苦を謝し、会議の成果を称えた。

なお今回の会議の紀要については、研究発表の完全原稿を九月末までに必ず送るよう、参加者にベルタ会長が要望したが、これは年内に編輯が出来れば、建国一千一百年記念事業に組み込めるからである。

この日の晩餐には、共に八十歳を迎えたサイナーとシュッツ Ödön（Edmond）Schütz の寿を祝して巨大なバースデイ・ケーキが出現、二人の親友がおどけてケーキ・ナイフを振り回して立ち回りを演ずる一幕があった後、一同シャンパンで祝杯を挙げた。

その夜、サイナー書記長が撮影した、初期の国際アルタイ学会の八ミリ映画をヴィデオにしたもの、ヴァルラーヴェンスが蒐集した紫光閣の功臣像（トルグートの王公を含む）のスライドなどが上映された。

二十日（木）は終日、遠足 Excursion に当てられた。

大型バス二台とマイクロバスに分乗してホテルを出発、先ずキシュクンハラシュ Kiskunhalas の町に至った。「キシュクン」とは「小クマン」を意味し、この地は十三世紀に入植して以来のクマン人の住地の中心である。クマン人たちは一七〇二年、ハプスブルク家によってドイツ騎士団に売却されて農奴となったが、一七四五年、マリア・テレジアに身代金を支払って自由身分を回復し、一千名のフサール騎兵 huszár を送ってプロイセン王フリードリヒ二世との戦いを援けた。一九九五年には、解放の二百五十周年を祝ったところであった。ただし現在では、言葉はマジャル語で、もはやクマン語は話さない。

キシュクンハラシュの市立高等学校で、市長トート Zoltán Tóth 主催の歓迎パーティがあり、現地出身のテノール歌手がオペラのアリアを歌い、続いてクリャシュトルヌイ S. G. Kljashtornyj が最後の研究発表「ポロヴツィ問題——内陸アジアの背景」を行った。内容は、出現の年代から見て、ポロヴツィ（キプチャク）とクマンとは別の種族であるという、興味あるものであった。

それから同地のレース博物館 Csipkemúzeum を見学した。特産の手編みレースは精巧かつ高価で、筆者が買い求めた展示即売の品は、直径十五糎ほどの小さな孔雀模様のものが一万八千フォリント（一万三千五百円）もした。

ハンガリーの物価からすれば、驚くべき値段である。昼食は市内のショーシュトーイ・チャールダ料理店 Sóstói Csárda でとった。

次にブガツ牧場 Bugac に至った。ここはプスタ puszta と呼ばれる、砂地に草がまばらに生えた平原で、ここから十人づつ無蓋の馬車に分乗して、草原の真ん中の牧童の馬術のショーを見に行った。これはまことに見事なもので、馬が地面に尻をついて座って卓上の皿から飼料を食べたり、裸馬の背に直立したまま一人で五頭を同時に御して疾駆したり、馬をじっと横臥させて耳元で長い鞭を振り回してぱちぱち空気を切る音をさせたり、馬上で疾駆しながら杭に掛けたコップを鞭で打ち落としたりと、妙技の数々が披露された。会場の近くにはプスタ博物館もあった。

再びブガツからバスに乗って、オープスタセル記念公園 Ópusztaszer に至った。ここはハンガリー人たちの先祖が建国後、最初のクリルタイを開いた地だそうで、ここにフェスティ・サイクロラマ Feszty Cyclorama がある。これは画家フェスティ Árpád Feszty が十九世紀末に建国一千年を記念して制作した巨大なパノラマ画で、アールパード公ら七人の部族長たちがカルパティア山脈をヴェレツケ峠で越えて侵入し、先住のスラヴ人たちを征服した故事を壮大なスケールで描いている。第二次世界大戦中に爆

撃で破損したのを、最近ポーランドから専門家の一団を招いて修復し、一九九五年に再び公開された。遊牧民の大テントを象ったドーム状の建物に納められ、下から入って三百六十度ぐるぐる歩き回りながら鑑賞するようになっている。終わって隣のセリ・チャールダ料理店 Szeri Csárda で伝統のハンガリー料理の晩餐となり、美味な蒸溜酒パーリンカ pálinka を味わった。ホテルに帰ったのは深夜であった。

最後の二十一日（金）は解散日となり、朝食後、一同別れを惜しみつつホテルを出発した。

なお会期中、ヨージェフ・アッティラ大学の図書館では、ハンガリーの著名なアルタイ学者リゲティ Lajos Ligeti の旧蔵書が公開された。

ハンガリーでこの学会が開催されたのは、一九七一年のセゲド、一九九〇年のブダペシュトに続いてこれで三度めである。六年前はまだ社会主義の疲労の痕が見えたが、今回は見違えるように明るくなって、ハンガリー人本来の優雅さと親切心に溢れた、気持ちの良い学会であった。

第三三回野尻湖クリルタイ

梅村　坦

一九九六年七月二一日から二四日に開かれた今回、のべ参加者は五八名であった。まずコンフェッションの要点を氏名五十音順に紹介する（文中敬称略）。

安部恭士（明治大）はモンゴル東方三王家の問題について卒論準備中。**アルタン＝オチル**（中国社会科学院）は中国辺境史地研究中心に在職のボルタラ出身モンゴル族。『オイラト蒙古簡史』『清代伊犁将軍論稿』などを出版。清代新疆の民族・歴史・地理を研究中。**池田知正**（東大）は博士課程で突厥史を中心に研究。旧東洋史の院生が中心になって雑誌『アジア・アフリカ歴史社会研究』刊行を始めた。**イナン＝オネル**（東大）はアンカラ大学日本語学科を卒業後ハジェテペ大学で日本史を学ぶ。日本の近代高等教育史と日本文学に興味をもつ。**上神敦子**（筑波大）は地域研究科修士二年。中国の民族政策と新疆について専攻。九月から専門調査員として北京の日本大使館へ。**宇野伸浩**（広島修道大）は「遼朝皇族の通婚関係にみられる交換婚」を『史滴』に発表。後編は東方学会の論集に投稿。海老沢